発掘された弥生のタイムカプセル

くにしせき 国史跡 しものごういせき 下之郷遺跡

下之郷遺跡は、滋賀県守山市下之郷町で発見された弥生時代中期の大環濠集落です。

幅の広い環濠が、集落のまわりに3条、さらにその外周に数条の溝が巡らされています。想定される集落の規模は、東西約330 m、南北約260 m、面積は、およそ7 haにおよびます。これは、この時代の環濠集落としては、滋賀県最大、全国でも屈指の規模を誇るものです。

集落を巡る環濠からは、土器に加えて多数の木器や石器などが出土し、当時の暮らしの様子がうかがえます。

まさに“弥生のタイムカプセル”ともいうべき下之郷遺跡の調査成果は、弥生時代を考える上で非常に重要なものであることから、平成14年に国史跡に指定され、遺跡の保存が図られています。

よみがえる弥生のムラ

下之郷遺跡は、多重の環濠に囲まれた弥生時代中期、今から約 2,200 年前の集落です。発掘調査によって、環濠や住居跡、それにともなう各種の施設なども発見されており、当時のムラの光景を具体的に復元できるのです。

3重の環濠（第9次調査）

第 23 次調査

第 61 次調査

発掘された環濠（かんごう）

弥生時代中期になると、周囲に幅が広く、深い濠をめぐらせたムラ（集落）が出現します。このような集落を「環濠集落」と呼んでいます。

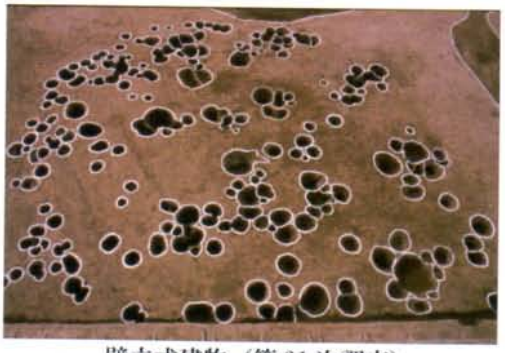
下之郷遺跡は、少なくとも３重の環濠をめぐらせた多重環濠集落であることがわかっています。

なぜこのような大規模な溝をムラの周囲に掘りめぐらせたのでしょうか。その理由には、戦乱などによる外敵の侵入を防ぐための防御施設という説、居住域と外界を区分する境界という説、水田に水を導くための灌漑用水路だったという説、あるいは生活用排水の役目を果たしたという説などがあげられます。

ムラの建物のさまざま

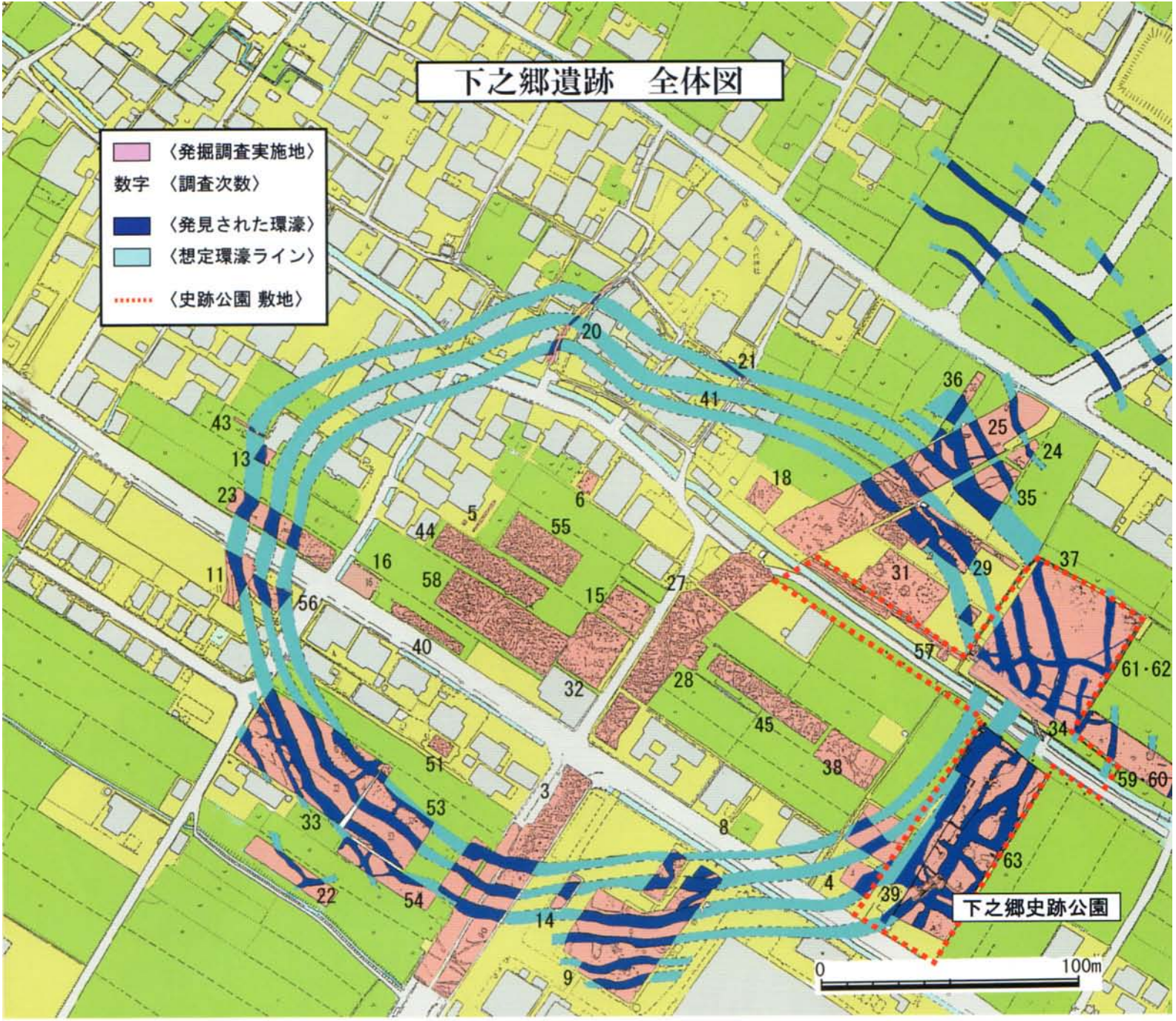
弥生時代の人々は、主に「竪穴住居（たてあなじゅうきょ）」と呼ばれる半地下式の住居に暮らしていたと考えられていました。ところが下之郷遺跡では、竪穴住居は一棟も発見されていないのです。これが下之郷遺跡の一つの特徴といえるでしょう。

下之郷遺跡では、「掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）」や、「壁立式建物（かべだちしきたてもの）」などが見つかっています。壁立式建物とは、壁で屋根を支える構造の建物で、そのルーツは朝鮮半島にあったと考えられています。また方形に巡る溝の内側に、棟持柱（むなもちばしら）を有する大型の掘立柱建物が見つかっており、これがムラの中枢施設であったと考えられています。



壁立式建物（第 31 次調査）

大型掘立柱建物（第 44 次調査）



環濠にともなう施設

広大な環濠の調査が進むと、それにともなうさまざまな施設も発見されました。

環濠の外から内へと続く“出入り口”は、環濠の一部を土で埋め戻し、通路上に整えて構築されていました。その周囲には多数の武器類が散乱して出土しており、この場で実際に戦闘があった可能性を示唆しています。また、環濠の底に杭を打ち込み、水止めの機能などが推測される“しがらみ杭”や、環濠に沿って建てられた“柵列”なども発見されており、当時のムラの景観を具体的に知ることができるのです。

出入り口と思われる陸橋（第 23 次調査）

しがらみ杭（第 63 次調査）

出土した弥生の暮らし

下之郷遺跡では、土器や石器に加え、多数の木製品などが出土しています。これらの出土品は、かつてのムラの営みの中で実際に使用されたものであり、弥生時代に生きた人々の生活の様子を物語る、とても貴重な資料なのです。

井戸から出土した土器

出土した土器

発掘調査では、必ずといっていいほど土器が出土します。それはかつての暮らしには、まさに不可欠なものだったことを示しています。これらを観察することにより、遺跡の時代や、当時の生活を想い起こすことができるのです。

下之郷遺跡から出土した土器は、多種多様にわたります。これらの検討の結果、この環濠集落が弥生時代中期、今から約2,200年前のものと判明したのです。また、東海地方をはじめとした他地域の土器も出土しており、この時代にはすでに広範囲な交流があったことがうかがわれます。

つぼ
壷

かめ
甕

だいつきはち
台付鉢

たかつき
高坏

まるまどつきどき
円窓付土器

みずさしがたどき
水差形土器

編み籠（あみかご）と籠目土器（かごめどき）

下之郷遺跡では、植物で編まれた籠や籠目土器が出土しています。これらを観察すると、当時の“編み方”をみることができます。出土したものからは、網代（あじろ）編み・ザル編み・六つ目（むつめ）編み・木目（きめ）編みの４種類を確認できました。

籠目土器は、井戸の底から出土し、弥生時代中期の細（さい）頸壷（けいつぼ）に、ツルをタスキ状に交差させて編んであります。

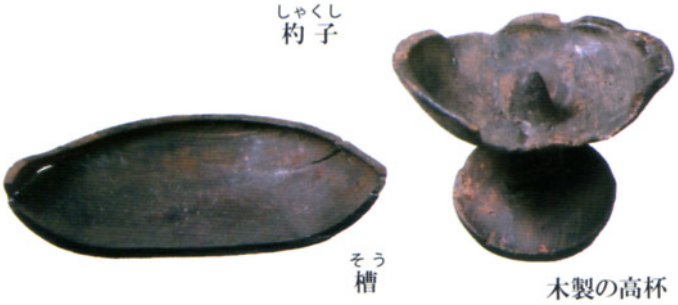
籠

輪状に編まれた
植物繊維

籠目土器

木製品のさまざま

杓子



槽　　木製の高杯

下之郷遺跡では、土器や石器の他に、多数の木製品が環濠から出土しています。

出土した木製品をみてみると、日常生活に使用する容器などをはじめ、農具や武器・武具など、用途に合わせて幅広い加工がなされていたことがわかります。

また、使用された樹木を観察すると、製品によって樹種の使い分けがなされていました。当時の人々はすでに優れた知識を持って道具の加工を行っていたことがわかります。

ココヤシ容器

ココヤシ容器は、幅 10.3cm 以上、高さ 10cm の大きさで、直径 4 cm の円い穴が開けられています。

この容器は、ヤシの子房痕を目に、中央に開けた穴を口に見立て、“口を開けた人の顔”を表現しているように見えます。容器にはわずかに赤色顔料が残っており、水銀朱で装飾されていたと考えられます。また、“補修痕”がみられることから、修理しながら大切に使用されていたことがわかります。

中央上の二穴が子房痕

中央下の二穴が補修痕

農具

鍬先

一木鋤

弥生時代は、稲作が本格化した時代でもあります。下之郷遺跡でも、多数の農具が出土しており、ムラでの盛んな稲作の様子を示しています。

土を掘り起こす鋤や田畑を耕す鍬、脱穀に使用する竪杵など、多様な農耕具が出土し、用途に合わせて様々な形に加工していたことがわかります。

多くの未製品

木製品の中には、作りかけの未製品も多数出土しています。ムラで使用する木製品を自ら製作している様が想い起こされます。

鍬先（柄を差し込む孔が空いていない。）

杓子（削り出しの途中）

戦いの道具 マツリの道具

環濠からは、多くの武器・武具などが出土しているのも下之郷遺跡の特徴の一つといえるでしょう。当時、“戦い”という緊迫した社会情勢があったこともうかがえます。また、ムラの存続・繁栄のために、カミへのマツリを行ったことも、出土遺物からみることができます。

銅戈の復元品

戈の柄

戈の柄（かのえ）

「戈」と呼ばれる武器の柄の部分です。中国の戦国時代に類例があり、長い柄の先に青銅の戈がつけられて、主に戦車の上から敵の首を刈るために使用されていました。

出土した戈の柄は、全長56cmでヒノキ材を丁寧に削り上げられています。柄の先には溝孔が開いており、その部分に青銅の戈が装着されていたと考えられます。

漆塗りのかざり弓（外周の溝より出土）

かざり弓（ゆみ）

下之郷遺跡からは、これまでに計10本以上の弓が出土しています。素材にはイヌガヤなど、弓を射る際に不可欠な弾力性を持った木材が使用されています。

中には、樺（かば）が巻かれたり、漆（うるし）が塗られた弓も出土しており、単に戦闘だけではなく、マツリに使用された可能性も考えられます。

楯（たて）

出土した楯は、全長105cmを測り、ほぼ完全な形を残していました。

これまでに出土している弥生時代の楯は、板材にモミを、そして表面に顔料を塗ったりしている事例が一般的です。それらと比較すると下之郷遺跡出土の楯は、板材にはスギが使用されており、顔料も塗られておらず、非常に珍しい型式です。

またこの楯を用いて、「年輪年代測定（ねんりんねんだいそくてい）」という、年輪の観察からその年代を測る科学分析が実施されています。その測定の結果、この楯は一番外側の年輪がB.C.223年のもので、約2200年前に伐採された木材を使用していることが判明しました。

楯表（左）と裏（右）

銅剣

出土した銅剣（左）とその復元品（右）

環濠の底から出土した銅剣

環濠の底から出土した銅剣は、「中細形銅剣」と呼ばれる種類のものです。

滋賀県内では最初の発見で、国内での出土例では最東端の事例になります。この銅剣は、切っ先が通常よりも短いことから、破損したものを研ぎ直したと考えられています。

石の武器・狩猟具

弥生時代中期には、さまざまな石器が使用されていました。その種類は、武器や狩猟具から、農具や調理具など、日常生活には欠かせないものまで多種にわたります。

下之郷遺跡でも石器が出土していますが、武器や狩猟具と考えられるものも多数見つかっています。中でも、矢などの先に取り付けられた「石鏃」は、打製石鏃と磨製石鏃の２種類が出土しています。前者は石を打ち欠いた縄文時代からの伝統を継ぐもの、後者は石を全面に磨いた大陸から伝来したものです。

磨製石剣

環状石斧

上段：磨製石鏃
下段：打製石鏃

弥生人のマツリ

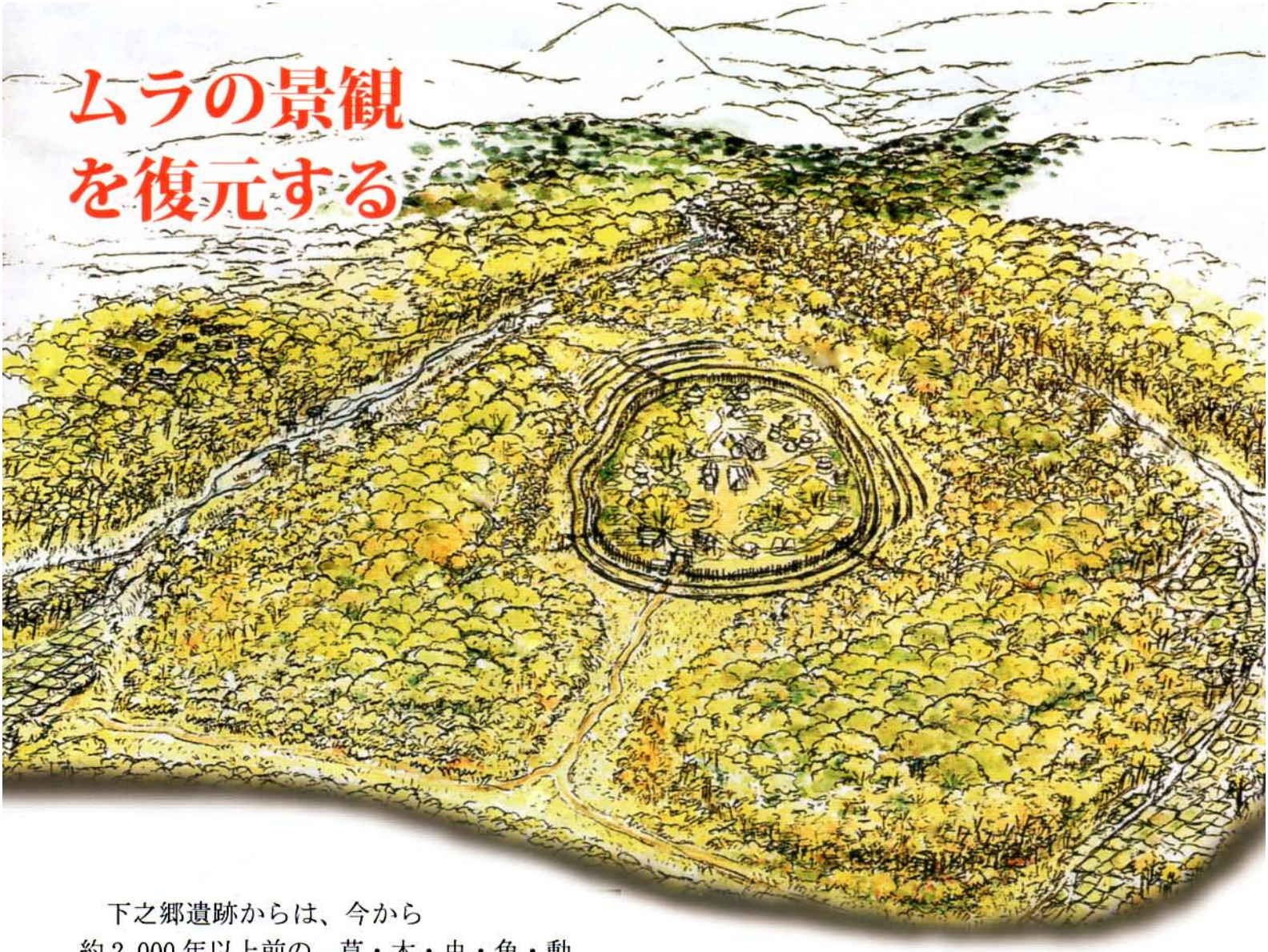
弥生時代の集落では、子孫繁栄・稲の豊作などをもとめて、さまざまなマツリが行われたと考えられています。

下之郷遺跡では、環濠から木で人をかたどった「木偶」や、鳥を模した鳥形木製品が出土しています。木偶は、祖霊をかたどったもので、“祖霊信仰の祭祀”に用いられたと考えられています。鳥は、遠方の祖霊や穀物の精霊を迎え入れる力があったと信じられており、鳥形は“悪霊除け”や豊作を願う祭祀に用いられたのでしょう。

木偶

鳥形木製品

ムラの景観を復元する



下之郷遺跡からは、今から約2,000年以上前の、草・木・虫・魚・動物などの“遺体（いたい）”が数多く出土しています。現在の研究では、このような出土した動・植物を鑑定することによって、いくつかの植生群（しょくせいぐん）を想定することができ、かつてのムラとその周辺の様相を推測することが可能になるのです。推定される当時の景観を示したのが、上記のイラストになります。

環濠集落の周りには、多種多様な林が広がっていたと考えられています。こういった研究は、当時の衣・食・住を考える上でも重要な資料になります。これも、多数の動・植物遺体が良好な状態で出土した、下之郷遺跡の研究成果だからこそ可能となりました。

下之郷遺跡は、滋賀県の、ひいては日本の弥生時代を考える上で、とても重要な遺跡なのです。わたしたちは、この守山市の宝を未来へと伝えていかねばなりません。

そのための遺跡調査、普及・啓発の拠点として設立されたのが、下之郷史跡公園です。公園内には、環濠保存施設・環濠調査施設・体験水田・復元環濠を設けてあります。

しものごう
しせきこうえん
下之郷史跡公園

所 在 地：滋賀県守山市下之郷一丁目12番8号
開館時間：午前9時から午後5時まで
休 館 日：火曜日（祝日は開館）
祝日の翌日・年末年始
入 館 料：無 料
T E L：077－514－2511

平成23年3月改訂